

昔話の昔を求めて

49期生

I テーマ設定の理由

最近、本屋さんで美しい絵本がでています。パラパラとめくっていると、自分が子供の頃に読んだ昔話とは違ったイメージのものが多いのに気がきました。一体、いつからこういう風になったのだろうか。そんな単純な疑問から、この私の研究は始まりました。

II 研究方法

- (1) 文献調査（書店、大阪府立国際児童文学館、大阪市立中央図書館）
- (2) 比較検討

III 研究内容

1. 昔話とは

冒頭に「むかし」という一句をそえて語る話。

昔話は、神話・伝説・世間話をはじめ、その他、口承文芸・民間芸能・文献記録と交流をもちながら展開してきたものである。

その中で、「桃太郎」「花咲爺さん」「かちかち山」「さるかに合戦」「舌切雀」のことを「五大昔話」という。

2. 出版物の比較

「さるかに合戦」と「舌切雀」をとりあげ、表をつくって比較した。

昭和以前のもの进行比较してみると、終戦までのものはカタカナで書かれており、あらすじ程度の簡単な話である。昭和40年以降になると、伝承話をもとに再話され、作家や画家の意志の現れた作品が出ている。

現在、書店で出版されている昔話は大きく2つに分けられる。1つは、小さな子供向けのようなもの(⑦⑧、⑦⑧)もう1つは、大人が読んでも充分におもしろく、また、絵も芸術的で、文学的な作品(⑨～⑫、⑨～⑫)である。



▲図1 猿蟹合戦(S12)

▼表1 「さるかに合戦」比較表

Table 1: Comparison of 'Sarukani Gassen' across 6 editions. Columns include name, author, publisher, year, and detailed descriptions of the story and characters.

Table 1 (continued): Comparison of 'Sarukani Gassen' across 6 more editions (7-12), including details on authorship and publisher.

▼表2 「舌切雀」比較表

Table 2: Comparison of 'Tsunetsugu' across 6 editions. Columns include name, author, publisher, year, and detailed descriptions of the story and characters.

Table 2 (continued): Comparison of 'Tsunetsugu' across 6 more editions (7-12), including details on authorship and publisher.

3. 検討

(1) さるかに合戦

さるかに合戦は、①柿の種とにぎりめしの交換 ②柿を大事に育てていくカニの姿 ③やっどできた柿をとるサル ④青柿をぶつけられたカニと子ガニの登場 ⑤仲間といっしょの仇討ち という構成から成り立っている。もとは、「寄合田」の話だけであったという説もあるが、仇討ちを肯定していた江戸時代に「赤本」にされてからこの形が定着したようである。もともこの話は農民の生活に密着した話である。カニが柿を育てる時の「はやくめをだせかきのたね。ださぬとはさみでちょんぎるぞ」という言葉は、小正月(1/15)に行われる「成木責め」の行事にもとづいている。また、苦勞してつくった作物(柿)を何もしなかったサルが大きな顔をしてとっていく。これは農民と地主の関係とも考えられる。また、仇討ちの仲間たちは、すべて農民達の日常生活とかかわりの深いものである。テーマは仇討ちのように見えるが本来は農民の豊作を願う話だったのかもしれない。

(2) 舌切雀

舌切雀は、①雀の舌を切る ②雀を探す ③もてなしを受ける ④みやげをもらう という構成になっている。鎌倉時代の「宇治拾遺物語」にてでくる「腰折れ雀」がもとであるという説もあるが、まったく別の話であると考えている学者も多い。一番の違いは②の雀を探す時の難問である。赤本の系統には難問はない。伝承話にはなにかしら汚いとか、不可能と思われる難問がある。牛や馬の洗いを飲んだり、ひどいものは小便を飲まされたりしている。これは、生理的不潔感をさそうが、雀に対する深い愛情が印象づけられる。また、もてなしの差には雀の抵抗が感じられておもしろいが、それをものともしないおばあさんにはとてもたくましいものがある。

4. 時代の流れに流された「桃太郎」

昔話は、多かれ少なかれ、時代の流れによって変化してきたが、「桃太郎」ほど時代の波にのまれ、意識的に変えられた話はないと思う。

(1) 「皇国の子」

明治は絶対主義天皇制を軸に、封建時代の遺制を温存しながら、ひたすら「富国強兵」の道をつき進んだ。

この時代の代表作品ともいえる、巖谷小波の「桃太郎」(M27)のストーリーはオーソドックスな形でかかれている。しかし、鬼は皇神すなわち天皇の教えにそむくものとし、桃太郎は、その鬼を征服して、皇国すなわち天皇の国を安泰にするのである。桃太郎は単なる智・勇・仁にすぐれた少年武士であるばかりでなく、天皇の名において鬼を征服する、皇国の子として位置づけられている。

(2) 「童心の子」

大正に入って、日本の児童文学は、芸術的童話・童謡の時代になる。鈴木三重吉主宰の「赤い鳥」が出版され、明治以来の国家教育、画一的な統制教育から脱出をはかろうとしていた。桃太郎は武勇の子ではなく、あくまで無邪気な子供(童心の子)としてとらえられている。

(3) 「階級の子」

大正中頃から、ヨーロッパを中心とした民主主義・社会主義的な思想が日本にも入ってきて、プロレタリア児童文学運動がうまれた。その中では桃太郎は労働者や農民を搾取する資本家や地主の権化として断罪されている。

(4) 「侵略の子」

昭和16年、太平洋戦争に突入。国民はすべての自由と権利をはく奪された。児童文学にも言論・思想統制が行われ、軍国主義は子供達を戦争にかりだすことに利用し、昭和18年あたりからは直接戦意を昂揚する児童文学以外は出せなくなった。西洋諸国は諸悪の根元で悪魔に支配されるものであり、天皇に治められた日本は美德の国で世界は日本に従うべきだという拜日主義・排他主義が桃太郎の行動をとおして主張された。侵略ではなく、聖戦であると正当化されている。その頃、海軍省によって「桃太郎の海鷲」というアニメ映画が作られた。この中で真珠湾は鬼ヶ島であり、アメリカ人は鬼、桃太郎は海軍航空隊長である。そして、10代半ばの子供達が次々に戦争へかりだされたのだ。もちろん利用されたのは「桃太郎」だけではない。実際に「サルカニカッセン」(S19)の裏表紙にも、サルは非道な仕打ちを次々とした米英人、カニ達は正直な我々諸民族としてとらえられ、団結し、やっつけようと書かれている。

(5) 「民衆の子」

1945年、日本は敗戦した。軍国主義に息の根をとめられていた児童文学もよみがえり、自由と民主主義の時代に即した新しい作品が次々と登場した。しかし、桃太郎だけは完全に姿を消していた。日本昔ばなしのシリーズの中にさえ、桃太郎は登場しなかったのである。侵略戦争のお先棒をかつがされ、戦争犯罪人として処断されたのである。1950年頃、木下順二を中心に「民話の会」が発足し、伝承本来の「民衆」の中からうまれた桃太郎を取り返すにはどうすればよいか、討論された。そして、児童文学作家達の努力によって「桃太郎」はまた復活してきたのである。

IV 考察

「むかし、むかし、あるところにおじいさんとおばあさんがおりました。」こんな出だしから始まる昔話は、祖父母や母親にお話ししてもらった「語り話」であった。だから同じような話でも地方によって違ったり、違う話が混ざったりしても少しも不思議ではないのだ。また、聞き手の対象によって話し方や内容が変わってもそれは自然である。そして、時代時代の思いがこめられ、変化していくのも当然である。私達庶民のたくさんの思いがこめられてきたのが昔話なのだ。

その語られてきた話が出版というような形をとるようになり、そこからゆがめられたり、固定されたりしていったのではないか。印刷物による人々に与える影響は大きい。その影響力に目をつけ、利用した最も大きいものが軍国主義だった。素朴で純粋であるはずの子供のための昔話が、このようなことでゆがめられ、利用されたことは悲しむべきことである。

昔話における残酷性についてどうとらえるかは、避けて通ることのできない問題である。波多野勤子氏により「昔話には残酷なものがある。そのようなものは話してはいけ

ない」「子供にそのまま与えるものではない」という考えが提起され、賛同される時期があった。(S30年代)しかし、現在では、この残酷否定論に疑問を唱える人が多く、また、私もそう思う。残酷なこと、不愉快なことを含めて世の中は成り立っている。都合の悪いものはすべて見せない方がいいという考え方で、本来の話や味わうべき所を変えてしまうのはおかしいと思う。昔話はしつけや教育とかのみで存在するわけではない。

再話とは民衆の間に伝承されていた語りをもとに、作家が創造的に関わりながら原話の表現や語り口を継承・発展させたものである。これはとても難しいことである。木下順二の「かにむかし」はとてもすばらしい。語り言葉と擬態語が、話を生き活きとほませている。声にだして読むとこんなに楽しいものはない。「これが昔話だ」という感じがする。

舌切雀のおばあさんは「意地悪で欲張り」ということになっているけれど、実は誰の中にもひそんでいる、人間味あふれるおばあさんではないか、というとらえ方もある。雀ばかりかわいがって、家計のこともかえりみないおじいさん。いつもイライラしながら家を守っているおばあさん。そう思うと、カッときて雀の舌を切ったのも、宝が欲しくて大きいつづらをとりに行ったのも自然な事だったのかもしれない。単純に考えていた昔話が実は解釈によって、とても深く人間味あふれた身近なもののように思われてくる。視点をかえてみれば他の話もまた、違った話のように思えてくるかもしれない。

たった1つの昔話でも、再話作家により、さまざまな解釈の作品ができあがる。ということを考えれば、私達読む側が真剣に「選ぶ」ということをしなければならないと思う。ただ出版側からの一方通行でなく、時代の流れや思想によってまちがった方向に利用されないよう、私達自身がしっかり判断し、見ていくことが重要であると思う。子供のみでなく、大人も昔話を楽しむ心を忘れないで生活していけたら良いと思う。

V 参考文献

- ・「日本昔話事典」
- ・「日本まつりと年中行事事典」
- ・「昔話は生きている」 稲田浩二 三省堂
- ・「昔話の発見—日本昔話入門—」 武田 正 岩田書院
- ・「桃太郎の運命」 鳥越 信 NHKブックス
- ・「昔ばなしと幼児教育」 矢口裕康 鉦脈社
- ・「五大御伽話の謎」 十久尾零児 虎見書房
- ・「昔話の世界 5」 河合隼雄 岩波書店
- ・「日本歴史図録」 山川出版
- ・「日本昔話大成 1, 4」 関 敬吾 角川書店
- ・「日本のむかし話 5」 坪田譲治
- ・「さるかに合戦」「舌切雀」 絵本多数